

第六章 大正時代

一 大正期の発達

1 大正前半期

人口の驚異的激増

明治の末年から急速に市街地化の歩を進めてきた当区の地は、大正期に至って驚異的な発展を示した。なかでも今宮村は、大正二年の人口一一、二五八が五年には二三、五八四と倍以上となり、一〇年には五三、二九二、一二年には七三、二四七と文字通り恐るべき増加振りであった。勝間村は今宮村ほどでもないが、二年九、一四二が一〇、五一四、一〇年には一七、四五三、一二年には二一、二九二とこれまた非常な発展振りであった。このため勝間村は大正四年一月一日町制を実施し、今宮村は大正六年九月一日より町制施行した。

また粉浜村はもと中在家・今在家の二村に分れていたが、明治二年の町村制実施に先立ち、明治一九年三月両村合併して粉浜村を樹立したが、その際の人口二、〇九六は、明治四三年には六、九六八、大正四年七、五四三、九年八、二七一、一三年一〇、九一一と激増し、津守村も明治三〇年四月津守村として川南村大字津守新田より一村独立(当時戸数三二、人口一、一一一)したが、人口余りに少なく今宮村と三六年まで組合村を形成していた。しかし大正二年には三、〇〇二、五年には五、一

二八、一〇年に六、八六七、一三年七、七〇四とやや前掲の南海本線に沿うた三村とは増加のテンポは遅かったが累年人口増加の歩を進めた。

今宮村第一
耕地整理組

さてこのような区内各町村勢の発達によって従来の村時代に見られなかった幾多の近代的公共施設も誕生した。まず今宮村では明治四三年二月早くも第一耕地整理組合の結成が認可され四四年四月その工事を完成したが、これは当時の周辺町村では類例のなかった画期的なものであった。その区域は南海本線西側で西は南海高野線を界とし南は玉出町および皿池、北は梅通に至る区域で、本区域には既述の通り日露戦争当時露国の捕虜収容所、第一六師団仮設兵營練兵場、陸軍予備病院があり、明治四一年一月その使用が廃されたのは地主に返還されていた。しかし元通りの耕地とすることに困難な事情もあり、端正な街とし清新な住宅地とする希望もあって実施されたもので、この事業終了によって、今日の梅・松・橘・桜・柳の各通りが生まれた。さらにこれにつづいて明治四三年一

今宮村第二
耕地整理組

月第二耕地整理組合の成立が認可されたが、この事業の範囲は、東は南海本線、東北部は関西線、西北部は市郡界である水路の南側をもって境とし、西は十三間川堤防際まで、南部は勝間村界および第一耕地整理地区に至る総面積一三七町一反一畝一二歩におよぶ広大な地区で、さきの第一耕地整理事業の約四倍の大きさであった。従ってその完成をみたのは大正九年三月末であり、完成後の町名改称によって旭南通一〇八、旭北通一〇八、鶴見橋通一〇八、鶴見橋北通一〇八、長橋通一〇九、出城通一〇九、南開一〇八、中開一〇六、北開一〇四、西四条一〇三、東四条一〇三の各所および花園町、

西萩町が誕生した。

村宮屠場

つきに今宮村では明治四三年七月より村宮の屠場を開いたが、これは明治三九年四月屠場法の発布（同年七月一日施行）があり、同法に現に在する屠場は本法施行後三カ年は本法の許可を受けたものと看做すが、期間満了後は本法による許可がなければ屠場の業務を営み得ないとされた。そこでそれまで以前個人の営利事業として大阪屠場株式会社（長橋通九丁目）があったが、屠場法では市町村をして経営せしめる方針であったことから、三九年九月いち早く村宮屠場の出願をしていたもので、その許可とともに費用一万九千九百余円を投じて敷地八〇〇坪、建物総坪二一五坪の屠場を建設するに至った。そして開場後は年々世間の需要が多く、多額の純益を生み町財政に寄与すること大であった。また四四年一月村費をもって家畜市場を設置することを村会にて定め、大正二年五月村内元木津に村宮常設家畜市場を開設した。（のち攝津畜産株式会社経営となる）

上水道の布設

前述のように村が大阪市の南区に接し、逐年下級労働者が増え交通便利の郊外地として発展し来ったが、衛生保健上からは何としても上水道の敷設が急を要することであった。かくて大正四年六月大阪市より市外給水の承認を得、村内を一四区に区画し、一区に一台の車と、担荷一四個（一個約一斗）と一人の配達夫を配置し、これに監督者一名を付け各戸に配達給水したが、人口は年々急増し、また防火のためにもかかる応急策のみでは間に合わず、水道管敷管の工事を開始し、大正五年八月これによる給水を開始し、一〇年またその拡張を行った。

飛田遊廓

注 この際の工事は南区水崎町で大阪市既設配水管から六吋管を分岐して同町を経て紀州街道を南下し、曳舟停留所南で二線に分れ、一線は四吋管となって南下し終に三吋半管となり、一線は五吋管となって西勝間街道に入り終に三吋半管となるもので、此幹線からは四吋及三吋半管を分岐して、要所には制水弁を設けて緩急に應ずるようにし、且四八個の防火水栓を設置して防火に遺憾なきを期した。

かかる公共施設の充実とともに今宮村北部の発展に大きな影響を与えたものは、当時の天王寺村大字天王寺中の小字北、中、南堺口の耕地二万二六〇〇坪を画して飛田遊廓が設けられたことである。もともとこの設置は、明治四五年一月一六日いわゆる南の大火によって難波新地の遊廓が廃止となり、営業者はその生業を失ったところからこの地を選定出願し、大正五年四月一五日その許可をうけるに至ったものである。その経営については阪南土地建物株式会社を設立して、土地買収、整理、家屋建築を行い、七年六月貸座敷用家屋一〇四戸、扉外商店用家屋三四戸、扉内商店用家屋八戸を竣成せしめ、七年一月二九日開廓式を挙げたものである。廓名を飛田といわれたのは、俗にこの付近を飛田と総称されたためで、大正一四年三月末には妓楼一七九戸、抱娼妓二〇五六、芸妓二五人におよび、松島とともに大阪有数の遊廓として繁榮し、廓外の大門通の商店街をはじめ、今池、菽之茶屋方面まで今宮東辺部の繁榮に大きな影響を与えた。

玉出町の上水道

つきに勝間村（玉出町）も大阪市の膨脹に伴って移住者が増加し人家稠密となったが、従来存する井戸はみな不良水であるため飲用に適せず、（村内井戸総数一七〇五カ所中、良水井戸二六三カ所）上水道供給の希望が大であった。しかし財政難と頑迷な一部論者の反対で容易に踏切り得なかったが、漸く

粉浜村の上水道

大正四年五月村会の議を得五年五月より給水した。しかしはじめは南区大國町より今宮村を経て引水する計画であったが、変更され天王寺村聖天坂を経て配水されることに改められた。そしてその後給水人口増加に伴うて二期、三期とその拡張に努めた。また粉浜村もその希望が大であったが、最南部に位置するため配管は今宮・玉出を経過する要があり、経費の点から遅れ、漸く大阪市から堺市へ供給する導水管を利用し大正一三年一〇月に至り上水道の恩恵をうけた。

津守村の上水道

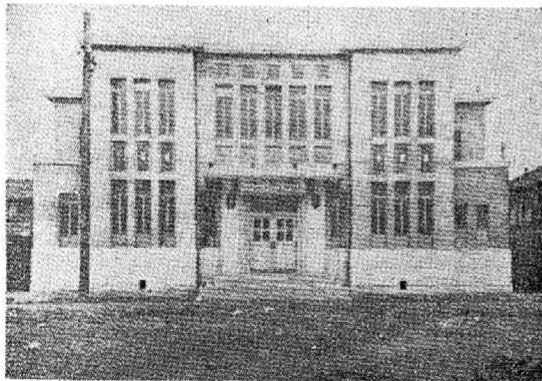
これに対し津守村は大阪市に直接に接しているため、いち早く大阪市と給水契約を結び、工費一万二千余円を投じ、南区西浜町より分岐して村内に配管し、大正三年三月三〇日から給水開始した。従って当区四カ町村中上水道の点では最も早かった。

2 大正後半期

米騒動

大正七年八月三日突如富山県の一漁村に発端したいわゆる米騒動は、たちまち全国各地に伝播し、大阪でも八月一日天王寺公会堂での米価調節市民大会で氣勢をあげた群衆の団が、天王寺・今宮（町内米屋、百余名の細民に襲わる）・日本橋方面の白米小売商を襲い、米の安値販売を強要し、情勢は日を追うて形勢不穏となった。そして遂に軍隊が出動し、まるで市内は戦時状態となり、一五日には新聞の暴動記事掲載禁止が行われ、一七日頃に至ってやっと沈静した。この事件の勃発原因については種々の見方があるが、世界大戦後の急激な物価騰貴に対して一般市民が非常な生活脅威を感じたのが主因であった。かかる点から庶民階級の町として発達しつつあった当区の四カ町村でもその後は社会

今宮町公設市場



今宮町立職業紹介所

施設の設置に多大の重点がおかれた。まず今宮町では当時の義捐金の残金をもととして八年八月花園町三六九番地に一六四坪を借入れ、建坪一一四坪の急造バラックを建て三八店を入れ公設市場とし、町会議員五名を委員して巡検督促に努めしめその声価維持に努めた。そして一二年五月その改築を行うとともに、同年六月鶴見橋五丁目に鶴見橋公設市場、一四年三月橋通五丁目に橋公設市場を増設した。また八年一月今宮第三小学校内に事務所を設けて方面委員をおき、釜ヶ崎地区の実情把握に努め、今宮町方面委員後援会なども組織した。さらに御成婚記念事業として一四年三月花園町三六五番地に職業紹介所（敷地二八五坪、建物鉄筋コンクリート造二階建四七・一三坪）および同じく一四年三月橋通五丁目七九八番地に公民病院（敷地四八〇坪、本館二階建八一・七五坪、平家病室七五坪各一棟等）などが建設された。

方面委員

職業紹介所

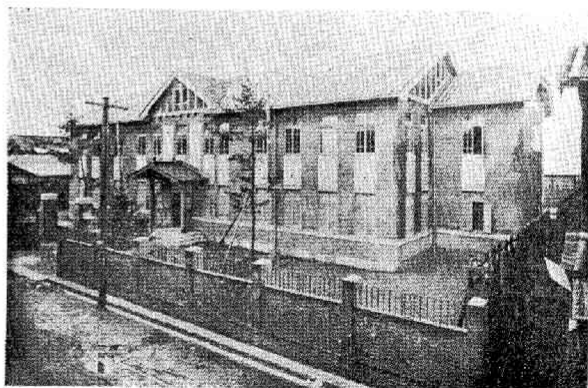
公民病院

玉出町公設市場

つぎに玉出町でも米騒動の際には在郷軍人の総動員を行って警戒にあたり、寄附金を募集してこれによって白米四〇〇俵を積んで米の廉売をし、その後の一般鹹金などを基として大正八年一

今宮町立図書館

相つぐ学校の増設



今宮町立公民病院

二月字中通五六九番地に町宮公設市場（敷地三三・八六坪、建坪九四・二五坪）を開設した。また一〇年七月全町を三二区に分ち一区一名の方面委員をおいた。このほか町村立施設として特色あるものに、今宮町立図書館があるが、これは大正一一年八月一日を期して花園三五二番地に開館したもので、大阪市編入後市立図書館として継続公開された。

本期において著るしく増設をみたのは、小学校をはじめとする教育施設であったが、まず今宮町では大正六年六月今宮第三（現萩之茶屋校）について一〇年四月今宮第四（現今宮校）、一一年一月今宮第五（現橋校）が相ついで増校され、各校の学校施設も児童数増加から校舍新築が相ついでだ。その上今宮第一には大正九年四月今宮商業補習学校が付設され、今宮第二では一三年四月から夜学一学級を増加して鮮人教育を行った。さらに今宮第三では大正八年五月昼間就学困難の者に簡易就学部を設け夜間教授を行っているなど注意すべき事柄であった。ついで玉出でも大正二年一〇月玉出第二（現岸里校）、九年九月玉出第三（現千本校）が開校さ

今宮職工学校の創立

阪堺・平野線の開通

町村制施行以来の町村長

れ、九年四月には玉出商業補習学校（修業年限二カ年）が創設された。粉浜村では大正一三年四月それまで長尾尋常高等小学校と称したのを粉浜尋常高等小学校と校名を改称するとともに、同時に村立付属幼稚園を併置した。津守村も粉浜村と一村一校であったが、大正一一年四月字南島に分教場を設け南部児童の便を図ったが、一三年四月これを独立させて津守第二（現南津守校）とした。最後に教育関係としては大正五年四月本区内唯一の中学校として府立今宮職工学校の創立をみたことである。以来同校は年々充実し今日大阪府内工業高校中の名門として発展し来た。

他方交通の上でも明治四〇年八月の南海本線の電車運転開始後、四二年一二月片岡直輝らが発起人となり阪堺電気軌道株式会社を創立し、四四年一二月恵美須町・大小路間に電車を開通せしめ、ついで浜寺公園、大浜公園に延長した。また大正三年四月今池・平野間に平野線を開通せしめていたが、これら両線は本区の交通便利を増大せしめること大であった。（大正四年六月阪堺と南海は合併し、以来南海阪堺線、南海平野線となる。）また市電も大正二年四月霞町線（恵美須町・霞町間）が開通し、本区北部から都心部への連絡がいよいよ便利となった。

かくて接続諸町村の人口増加は遂に大阪市への編入を迎えるに至ったが、ここに明治以来の町村長をあげると次の通りである。

今宮村津守村組合村長	就職年月日	退職年月日	氏名
今宮村長	明治三〇・四・一	明治三六・三・三一	渡辺 麻次郎
今宮村長	三六・四・一	四〇・二・一四	同

同	今宮村長	明治四〇・五・一八	明治四〇・一・二	明治四〇・一・一	田岡典章
同	同	四四・一一・二〇	大正三・六・二三	四四・九・二〇	勝田楨太郎
同	同	大正三・七・一一	六・七・二〇	六・七・二〇	広江武藏
同	今宮町長	六・九・二〇	六・九・二九	六・九・二九	四ツ谷福松
同	同	八・八・二二	一二・八・一五	一二・八・一五	中野豊三郎
同	同	一三・八・二七	一四・三・三一	一四・三・三一	四ツ谷福松
勝間村長	明治三三・四・一	明治三八・五・一五	明治三八・五・一五	後藤儀三郎	
同	同	三八・六・二七	三九・三・二八	三九・三・二八	金森武右衛門
同	同	三九・四・一七	四三・四・一六	四三・四・一六	沢田賢次
同	同	四四・五・六	四五・一・二七	四五・一・二七	沢田賢次
同	同	四五・三・一	大正三・一・八	大正三・一・八	土肥喜右衛門
玉出町長	大正四・七・八	八・三・二六	一一・七・一五	一一・七・一五	土肥喜右衛門
同	同	一一・八・二九	一四・三・三	一四・三・三	高橋浅水
同	同	一一・八・二九	一四・三・三	一四・三・三	漆島佐吉
同	同	一一・八・二九	一四・三・三	一四・三・三	芝村佐七
粉浜村長	明治二二・五	明治二三・三	明治二三・三	明治二三・三	本田勘四郎
同	同	二三・一〇	三三・五	三三・五	本田勘四郎
同	同	三三・八	三五・四	三五・四	七野安兵衛

同	同	明治三五・五	明治三七・七	村上慧
同	同	三七・八	四一・八	羽田久藏
同	同	四一・八	四四・一〇	村上慧
同	同	四四・一一	大正三・一	本田熊治郎
同	同	大正三・一	八・七	芝村福三
同	同	八・九	九・二二	本田熊治郎
同	同	九・一二	九・二二	芝村福三
同	同	一〇・一	一四・三	七野力松
同	同	一〇・一	一四・三	七野力松
津守村長	明治三六・五	明治三六・五	三七・二〇	江上彦助
同	同	三七・一一	大正六・一一	吉川吉郎兵衛
同	同	大正七・三	一一・三	河井徳松
同	同	一一・四	一四・三	河井徳松
天王寺村長	明治三〇・八・一	明治三二・一一・二〇	明治三二・一一・二〇	芽木小兵衛
同	同	三三・四・二	三七・四・一	後藤満寿長
同	同	三七・四・二	四一・四・一	道野源七
同	同	四四・四・九	大正四・五・一五	増田忠三郎
同	同	大正四・七・二三	九・一一・一六	柴谷伊之助
同	同	九・一二・二四	一一・四・八	泉岡宗助

同 大正一一・六・一七 大正一四・三・三一 武 岡 充 忠

二 市域拡張と西成区の成立

大阪市の発展

本市は明治三〇年四月第一次市域拡張によって従来の一五平方キロから一挙三倍半の五五平方キロに拡大され、本区旧町村区域である今宮町・津守村が大阪市に接することとなった。その後日露戦争があり、また大正時代に至って第一次世界大戦の勃発などから経済界は空前の活況を示し、その工業生産はわが国第一位となり、海運においても神戸・横浜を遙かにしのぐという有様で、大正一三年にはすでにその人口は一四三万を突破し、接続町村も非常な勢で増加した。しかし周辺各町村ではとかくその間の連絡が十分でなく、都市施策を樹立する上で遺憾の点が多々あった。特に都市計画の樹立や教育・保健・社会の諸施設が各町村ばらばらとなり、あらゆる面で行詰りの状態であった。そこで本市では大正一〇年八月市域変更調査会を組織し、鋭意市域編入の範囲や町村の状況などを調査し、都市百年の大計樹立の上から、この際大きく市域を拡大すべきであると決したが、当時の内務省としては編入区域は家屋連担、人口稠密の土地ですでに市街地化した町村でなければならぬとして、淀川以北や現在の東住吉区々域の各村の編入についてはなかなかこれを認めなかった。しかし将来の都市発展の趨勢からこの際思切った大拡張を必要とするとの関市長らの達見によって遂に東成・西成の両郡四四カ町村の一挙編入が実現し、本市は従来面積五八・四五平方キロより一躍一八一・六八平方キロ

市域変更調査会の設置

現大阪の出

口、人口もまた一三二万人から二二一万人に増加し、名実とも本市はわが国都市中第一位となり、人口の点では世界第六位を示し、以来世間では大大阪と呼ばれるに至った。さてこの編入直前の当区関係町村の状態をみると

町村名	面積		戸数		人口		増加率	密度
	平方哩	戸	大正元年	大正一三年	増加人口	割		
大阪市	三・八	三三〇,三七七	一,三三〇,九〇九	一,四三三,八〇三	一〇二,八九四	〇・七六	三二,八四四	
西成郡	一・八三三	八六,四四五	一五九,六三三	三九九,四〇一	二〇八,八八元	一三・八六	一九,七二七	
今宮町	一・〇	一八,四六七	三三,九六九	七五,四四〇	四一,四七一	一三・八六	四三,五二〇	
玉出町	〇・五	六,三三六	一〇,九六四	二四,五〇〇	一三,五三六	二二・九三	四三,七六六	
津守村	〇・〇八四	一,八一	三,〇七五	一〇,三三三	六,七七七	一八・九	一三,三七九	
粉浜村	〇・〇四	三,六三	七,七五九	一〇,九二	三,一五五	四〇・七	三三,〇三一	

備考 一、大阪府統計書による 二、面積、戸数および密度は大正一三年現在とす

人口稠密の各町村

のような有様で、人口密度の上で今宮町の如きは大阪市よりも高い密度を示し、増加率の点では四カ町村とも遙かに大阪を凌いでいた。ところがこれら四カ町村の財政負担をみると、著るしく義務教育費が多く、大正一三年度歳出額で大阪市が二割八分九厘の教育費であるのに対し、今宮町では四割四分六厘、玉出町は四割九分二厘、粉浜村は五割三分三厘、津守村は五割六厘という風で、各町村とも教育費負担に苦しんでいた。しか

も接近町村の人口増加の趨勢は非常に高く、学齡児童は激増し、尋常科でも大阪市の平均四八人に対し、粉浜村で一学級当り六五・一人、今宮町では五八・八人という有様であった。このほか道路施設の不備、社会施設の欠陥、保健上の障害を排除するためには到底貧弱な町村財政で処理することは困難であり、各町村とも大阪市への合併を希望していた。

しかしもちろん無条件というわけではなく各町村より編入条件及び希望条件を示したが、市はそれは絶対的拘束力としてではなく将来の参考にすることとし、町村側もあえて固持せず相互の誠意に信頼すると了解し、編入手続は円満に進んだ。

編入希望条件

西成郡

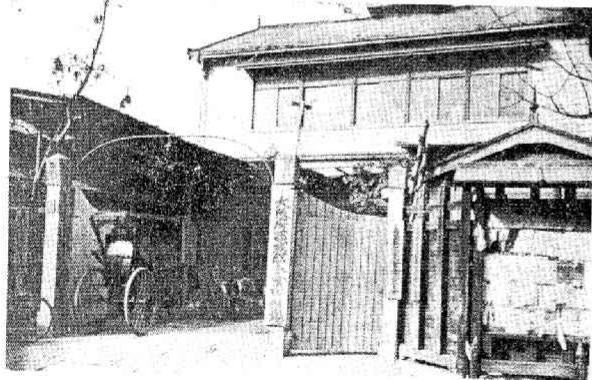
共通的編入条件

- 一、新編入区域を以て五区を編成すること
- 二、市会議員配置は新区と旧区とに論なく市制の原則に基き人口を標準として定むること
- 三、学制の統一は是非共此の際断行すること。万一此の際直に実行不可能なりとし行政区を以て一学区と為す場合には学制の統一実現に至る迄新市に属する学校増設費は市の一般経済より支弁すること
- 四、町村費を以て補助し来れる各種公益団体の維持の途を講ずること。即ち市は年々之に市費補助を為すは勿論此の際町村財産の一部を与へて基本金造成を認むること（以下五ノ九省略）

共通的希望事項

- 一、区役所庁舎の完備は速かに之を断行せられるべく尚ほ其の間現在の町村役場は出張所として其の区域内に属

第一次西成区の成立



市域編入後、区役所として使用された今宮町役場

- 二、義務教育の施設を完備し二部教授の如きは絶対に之を避けられたし
- 三、現代の町村道は悉く市道に認定し其の修理の完全を期するは勿論国府道の改築舗装工事等既に府が計画を樹立せるものは絶対に繰延を為さざる様せられたし

- 四、新編入区域に対し市電の開道を速かならしめらるべきは勿論一時応急の措置として既設会社線に対し市電乗車券共通の途を講ぜられたし
- 五、消防署の設備を速に完成せられたし。尚ほ其の間現在の消防施設を襲用府費を以て処弁せられたし
- 六、上下水道の急を要するもの尠からず速に其の実状を査察し着手せられたし（以下七ノ一省略）

かくてこの市域拡張の結果、旧市は八区、新市域は五区の行政区画に分れ、旧西成郡今宮町・玉出町・津守村・粉浜村の四カ町村をもって、大正一四年四月一日第一次西成区の設立をみた。そしてその区役所の位置については当分の間花園町三四九番地の一の旧今宮町役場がそのまま区役所として使用された。なお旧玉出町役場は水道出張所、粉

浜村役場は西成学区、津守村役場は保健出張所に転用された。また初代西成区長として野々田為吉が就任し、初の市会議員としては六月二日、四日の開票結果、一級中村寅吉、岩間繁吉、二級八代徳太郎、吉川吉郎兵衛の四氏が当選した。

つぎに編入とともに西成学区が設置されたが、当時周辺部の編入条件に学区廃止があげられ早晚実現すべきものとしながら、これには府税、家屋税の改正を要するため昭和二年三月末日を限って学区廃止を実現せしめることとした。そのため二カ年間の学区であったが、本学区によって区内の小学校並びに幼稚園、実業補習学校の設備改善が図られたことは、まことにその意義大であり、その頃御真影奉安庫が建設せられるとともに、村制時代腐朽した校舎の増改築、あるいは二部教授の全廃などに努められた。

西成学区の設置

学区別教育事業調（大正一三年末現在）

学区	尋常小学校		高等小学校		実業補習学校・裁縫学校		幼稚園	
	校数	児童数	校数	児童数	校数	生徒数	園数	幼児数
西成区	一一	一一、九二三	五	一、二二二	二	九七	一	一七四

第七章 昭和時代

一日華事変まで

相つぐ市施設の設置

かくて待望の市域編入が実現し、大阪市部となってからぞくぞく市の新たな施設も設けられ、人口増加に対応して学校もつぎつぎ増設された。すなわちまず大正一四年九月には花園町のもと菽之茶屋職業紹介所跡に、市設今宮公益質舗、一五年五月橋通五丁目に市立今宮産院、昭和二年四月千本通三丁目に西成区役所の新築落成、四年二月東田町に市立今宮保護所並びに東入船町に今宮改良住宅、同九月粉浜公設市場、同十二月玉出市民館、八年三月桜通八丁目に西成託児所など市社会保健施設が相ついで創設された。また学校についても大正一四年一〇月津守第三（現北津守校）、昭和二年四月今宮第六（現松之宮校）、同六月徳風勤労学校、五年五月今宮第七（のちの開校）、同五月東粉浜などの各尋常小学校が新設された。大正一四年国勢調査人口一三七、六三二が昭和五年には一六七、八七九、昭和一〇年二〇三、五三〇と驚異的な増加振りを示していることから見ても、従来の農地が宅地化して行く様子を推測することができる。

小学校の増設

交通機関の発達

こうした発展は一にまた交通が至便となった点に因しており、まず南海では大正一五年南海本線と

浜村役場は西成学区、津守村役場は保健出張所に転用された。また初代西成区長として野々田為吉が就任し、初の市議員としては六月二日、四日の開票結果、一級中村寅吉、岩間繁吉、二級八代徳太郎、吉川吉郎兵衛の四氏が当選した。

つぎに編入とともに西成学区が設置されたが、当時周辺部の編入条件に学区廃止があげられ早晚実現すべきものとしながら、これには府税、家屋税の改正を要するため昭和二年三月末日を限って学区廃止を実現せしめることとした。そのため二カ年間の学区であったが、本学区によって区内の小学校並びに幼稚園、実業補習学校の設備改善が図られたことは、まことにその意義大であり、その頃御真影奉安庫が建設せられるとともに、村制時代腐朽した校舎の増改築、あるいは二部教授の全廃などに努められた。

西成学区の設置

学区別教育事業調 (大正一三年末現在)

学区	尋常小学校		高等小学校		実業補習学校・裁縫学校		幼稚園	
	校数	児童数	校数	児童数	校数	生徒数	園数	幼児数
西成区	一一	一一、九二三	五	一、二二二	二	九七	一	一七四

第七章 昭和時代

一日華事変まで

相つぐ市施設の設置

かくて待望の市域編入が実現し、大阪市部となってからぞくぞく市の新たな施設も設けられ、人口増加に対応して学校もつぎつぎ増設された。すなわちまず大正一四年九月には花園町のもと菽之茶屋職業紹介所跡に、市設今宮公益質舗、一五年五月橋通五丁目に市立今宮産院、昭和二年四月千本通三丁目以西成区役所の新築落成、四年二月東田町に市立今宮保護所並びに東入船町に今宮改良住宅、同九月粉浜公設市場、同十二月玉出市民館、八年三月桜通八丁目以西成託児所など市社会保健施設が相ついで創設された。また学校についても大正一四年一〇月津守第三(現北津守校)、昭和二年四月今宮第六(現松之宮校)、同六月徳風勤労学校、五年五月今宮第七(のちの開校)、同五月東粉浜などの各尋常小学校が新設された。大正一四年国勢調査人口一三七、六三二が昭和五年には一六七、八七九、昭和一〇年二〇三、五三〇と驚異的な増加振りを示していることから見ても、従来の農地が宅地化して行く様子を推測することができる。

小学校の増設

交通機関の発達

こうした発展は一にまた交通が至便となった点に因しており、まず南海では大正一五年南海本線と